

令和 2 年 度
宮崎国際大学 教育学部
指定校推薦入学選考

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

問題 三浦しをん氏は、「『知りたい』」は、自分以外の存在に目を向け、心やこの世界や生命の謎に迫らずにはいられない、人間に備わった根源的な欲求だ。」と書いています。あなたの大学に入ってから「知りたい」は何ですか。また、あなたは将来子どもの教育に携わる立場として（小学校・幼稚園・保育所等）、子どもの「知りたい」心をどのように育てていきたいと考えますか。800字以内で述べてください。

三浦しをん（作家）

『愛なき世界』という小説を書いたところ、「日本植物学会賞特別賞（その他）」をいただくことになった。「研究歴ゼロ年の身なのに、が、学会賞……!？」と恐縮でぶるぶるしている。

あ、「（その他）」とはなにかというと、「特別賞（技術）」でも「特別賞（教育）」でもない、「（その他）」ってことだ。たしかに小説は、「（技術）」でも「（教育）」でもないな、うむ。論文ではなく小説がいきなり候補のなかに混じっていて、選考委員である植物学者のみなさまも困惑されたのではないかと推測するのだが、それでも「賞を」とおっしゃってくださったこと、身に余る光栄でござる。ぶるぶる。

『愛なき世界』は、大学院で植物の研究をする女性が主人公の話だ。研究仲間の院生たちとの青春群像劇に、近所の洋食屋さんで働く青年との関係がどうなるのか、という恋愛風味も少々まぶしてある。でも、私が一番焦点を当てたかったのは、「植物学って、植物を研究しているひとたちって、すごくおもしろい!」ということだ。

この小説を書くにあたり、植物学について取材をした。東京大学大学院の塚谷裕一研究室をはじめ、いくつかの大学や研究機関にお邪魔し、院生のみなさまが日々どのような研究や実験をなさっているのか、見学させてもらったのだ。お忙しいにもかかわらず、先生がたも院生のかたたちも、質問したらなんでも親切に教えてくれた。質問しなくても、多肉植物やシロイヌナズナや水草の魅力を熱く語ってくれた。このひとたちは……、植物を好きすぎる!

「葉っぱって、どうしてこの形とサイズで生えるんだろうと思いませんか?」と院生の女性に輝く瞳で聞かれたときは、正直なところ「思いません」と思ったのだが、よく考えてみればたしかに不思議だ。なぜ、カエデはカエデの葉っぱの形になるのか。なぜ、新聞紙サイズまで大きくなるカエデの葉っぱは存在しないのか。「あたりまえ」と思っていたことが、実はちっともあたりまえなどではなく、謎と不思議に満ちあふれているのだと気づけた。なんだか洗いたての眼球で世界を見たような気持ちになった。

私は小学校の時点ですでに算数がおぼつかず、理系の授業中にもっぱら睡眠学習に勤（いそ）しむ派だったのだが、かれらがこれほどまでに魅せられ、文字どおり寝食を忘れて研究している植物とはいったいなんなのだろうと、どんどん興味が湧いてきた。とはいえ、遺伝子の順列組みあわせについてレクチャーを受けたときには、あまりにもわからなすぎて脳の回線がショートし、「睡眠学習再び」の危機に陥った。「どうして理系分野を題材に小説を書こうなどと思ってしまったんだ」と絶望的な気分になったが、塚谷先生や院生のみなさまの根気強い導きのおかげで、なんとか（睡魔の山を）乗り越えた。

葉っぱの謎をすべて解き明かせたとしても、生活が便利になるわけではないだろう。け

れど、「すぐに生活の役に立たないから、無駄な研究だ」と判断するのは、非常に危険な思考だ。では、「社会の役に立たない人間」は無駄な存在なのか？ 断じてそうではない。私たちはこの世に生をうけたから生きている。それだけで充分なのだ。

生きるなかで、「愛するあのひとの気持ちを知りたいな」と願うことがあるように、植物の研究者は、「愛する植物の仕組みを知りたいな」と願って日夜研究に没頭している。「知りたい」は、自分以外の存在に目を向け、心やこの世界や生命の謎に迫らずにはいられない、人間に備わった根源的な欲求だ。私はそれを貴いと感じた。その思いを、『愛なき世界』にこめたつもりだ。

小説を通して、植物と植物の研究者のみなさまの不可思議で魅力的な生態に触れていただけたらうれしいし、「すぐに役には立たないかもしれないけど、とても大切でおもしろいものなんだな」と、植物の研究をはじめとする基礎研究を応援していただければ、もっとうれしい。

(「「知りたい」という気持ち」『文藝春秋』2019・7)